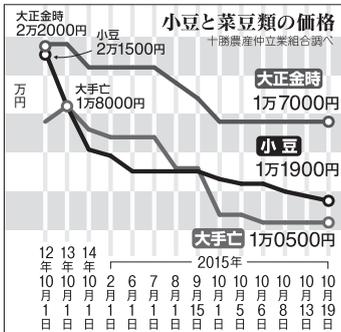


今年産も含め、ここ数年豆類の豊作が続いていることで、十勝産の豆類の価格が下落している。小豆はここ1カ月に1俵（60キロ）当たり約2000円値を下げ、3年前の半額近くに。手亡や大正金時などの菜豆類も続落している。生産者の手取り収入減少につながり、来年の作付面積にも影響しそうだ。



小豆や菜豆類は民間流通で、価格が大きく上下することがある。冷害の影響を受けやすく在庫が増減するため、戦後すぐは先物取引で価格が高騰し「赤いダイヤ」と呼ばれた時代もあった。十勝産小豆は全国の半分程度

を占める。

十勝農産仲立業組合によると、小豆の価格は脱穀したままの「素俵（すびょう）」で、10月22日現在、1俵1万1900円。2012年10月ごろは同2万1500円で、半分近くに落ち込んだ。

小豆の価格は収穫期を迎える9～10月を中心に動く。今年9月1日は1万3800円だったが、今年も豊作が見込まれたことで徐々に値を下げている。

近年の推移をみると13年10月は1万8000円、14年10月は1万5200円と、年々下落している。

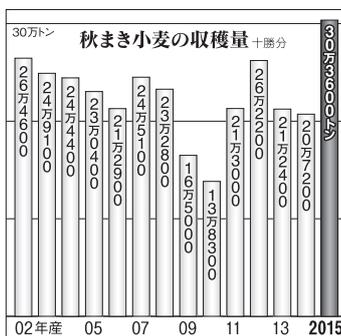
業界関係者によると最近では豊作が続いて1年以上の在庫があり、今後も下げ傾向は続くともみられている。

菜豆類も大手亡が今年10月1日で1万1000円で、昨年に比べて5500円ほど下がった。大正金時も今年10月は1万7000円で昨年に比べ3500円ほど下げた。

雑穀卸の丸勝（帯広市）の梶原雅仁社長は「平成15（2003）年以降、冷害による凶作がない。中国産の価格が以前よりも上がり、輸入も少ないので、割安になってきた十勝・北海道産が積極的に消費されるのは悪いことではない。ただ、来年の作付けが減って、その時に凶作が起こるのは心配」とみる。

豆類生産者団体の会長を務める豊頃町の農家山崎浩道さん（45）は「豊作なので安くなるのはどうしようもない。欲しいと言われるものは作りたいが、生活もあるのでみんなの意見を聞いて、作る品種を変えるなど対策を取らないと」と話している。

24日公表された十勝管内J Aの農畜産物取扱高によると、今年産小麦の収穫量は前年比46.5%増の30万3600トンと過去最高の大豊作となった。十勝総合振興局は、恵まれた気象条件に加え、主力品種「きたほなみ」の栽培方法が定着したことを要因に挙げ、「きたほなみが能力をフルに発揮した」と分析している。



十勝では前の品種「ホクシン」から2011年に、きたほなみに転換。新品種は収量2割増が特徴とされたが、これまでは天候不順もあって収穫量は12年の26万2200トンが最高で、ホクシン時代の過去最高（02年の26万

4600トン）を超えられなかった。

しかし今年の収穫量は各地で最高を更新し、初の30万トン超えを記録。製品の歩留まりも良く、管内J A取扱高は前年比55%増の408億円に達した。

これを受け、十勝総合振興局では十勝農業改良普及セ

ンターを中心に、多収・高品質となった要因を分析していた。

同センターによると、第1の要因は小麦の成育に適した気象条件。出穂期（6月）を中心に日照時間が長く、最低気温が低かったことで登熟期間は前年比7%増の48日間と長くなり、1穂の粒数も多く粒も充実した。病害虫の発生も少なかった。

第2は栽培方法の浸透と定着で、同センターを中心とした関係機関による普及により、適期に適正量のは種や施肥などが行われたとしている。

導入5年目での期待に応える成果に、同センターの上館伸幸所長は「これまで伸び悩んできた、きたほなみのポテンシャルがフルに発揮された。今後さらにノウハウを蓄積し、安定栽培に向けた普及活動をしていきたい」と話している。